

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13403

研究課題名（和文）図会と絵本読本の生成・出版、及びその近世中後期上方文学界の動態との関連の研究

研究課題名（英文）Studies on the generation and publishing of illustrated books, and their relationship to the current of literary circles at Kamigata in the middle and late period of early modern ages

研究代表者

藤川 玲満 (Fujikawa, Reman)

お茶の水女子大学・基幹研究院・講師

研究者番号：20509674

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：文運東漸後の上方の文学の意義を捉え直す為、図会と絵本読本を研究対象の中心として、作品制作の具体相、様式の成立と展開、作者の用いた小説の技法と趣向、上方文学界の動態との関係について解明を行った。その結果として、図会もの読本の主要作者秋里籬島による歴史叙述における実証性の重視や、創作性の志向に限らない着想や編集の試みが明らかとなり、また、これらの事象には当代性が窺えた。ほかに、図会様式の諸ジャンルへの適応性の高さや、作中での文学的素養の発揮をめぐる文壇の営為との相互作用も明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、近世中後期の上方の文学は低調と見做されることが多かったが、十分に解明が尽くされているとは言い難かった。そして、これまでの評価は主に創作性の観点でなされてきた。本研究は、作者・作品に関して中後期上方の文学の具体的解明を進展させた意義があるとともに、作品群の持つ特質・傾向について、ジャンル間の接続関係も解明しつつ、作者の志向を捉えることで新たな見方を提示した点に意義がある。また、図会は時代の文化事象であり、文化史の解明としても意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of reconsidering the significance of literature at Kamigata after the cultural metropolis having been shifted to Edo and, we analyze, by targeting illustrated books for the main theme of our research, the actual circumstances of producing works, the invention and development of book patterns, the art and taste for novels used by the writers, and the relationship with the current of Kamigata literary circles. We revealed the facts that the description of historical events in "zue-mono" (illustrated books) by Akisato Rito are faithfully based on the realities, and that there are certain conceptions and attempts at editing books which are not necessarily pursuing creativity. We can find some features of that age in these phenomena. We also revealed high adaptability of the patterns of illustrated books to various types of other publications, and the interaction with the activities of the literary world demonstrating literary backgrounds in their works.

研究分野：日本近世文学

キーワード：近世文学

1. 研究開始当初の背景

文運東漸後(近世中後期)の上方の文学は、江戸の文学に比して低調であるとされるが、その内実に関しては、まだ十分に解明されていない部分が少なかった。

近世中後期の上方の文学に関する従来の研究には、作者の伝記研究や、文学者たちの交流圏の解明があり、報告者もこれらに続いて文運東漸後の上方から発して隆盛を見た「名所図会」作品群とこれを創出した京都の作者秋里籬島に着目し、従来殆ど不明であった籬島の伝記・文学活動と籬島の著作の形成方法を明らかにしてきた。また、籬島作品と関連するものとして絵本読本があるが、その出版事情や種本の解明が進められるなかで、上方作者の対する旧来の低評価を見直す指摘も出されている。籬島による「図会もの」の読本を含め、未解明の作品は依然多くあり、それらの作品群の生成の全体像や、制作と同時代文学界の動向との関わりの実態は、解明が待たれる状況であった。

報告者は、これまでに籬島の名所図会作品の成り立ちについて、先行地誌類などの典拠との関係、形成の実態と制作手法を明らかにし、そのことと籬島の小説・読本の関連や作者の歴史に対する意識、素材の文芸化の観点からこの時期に特有の文芸生成の構造を見出すことができるのではないかと考えた。また、籬島の文芸的な基盤としての同時代の俳壇・狂歌壇との関連や伝記的事項、著述環境としての著作の板元書肆の動向に関するこれまでの研究についても、図会・絵本読本領域を主体とする検討へと発展させることが必要であると考えた。

2. 研究の目的

従来の研究での不明部分を補い、その上で中後期上方の作品群・文壇動向の意味を検証する方向で、文運東漸後の上方の文学の意義を捉え直すことを目的とした。具体的には、図会・絵本読本作品を研究対象として、これらの成り立ちの実態と、作者の歴史意識や素材の文芸化における特質を解明し、このことと上方文学界・出版界全体の動態との相関関係を捉えていくこととした。そして、これを近世中後期における文芸生成の構造の解明、また同時期の著述(書物制作)が依拠する知識体系の把握に繋げていくことを目指した。

3. 研究の方法

主に次の点を眼目として調査研究を行った。

(1) 図会・絵本読本作品の本文形成の実態・手法の解明

主要作品について、各作品の全編にわたって引照する調査を行い、素材源・先行作との典拠関係、利用方法の実態を明らかにした。

(2) 様式の成立と展開に関する調査研究

図会の様式が既存の文芸ジャンルをどのように継承し、どのように改変して生成されたのか、そして、確立された図会の様式が、以後、諸ジャンルのなかにどのように浸透していったのか、その実態と事情を明らかにした。

(3) ジャンル間の接続関係の解明

史的題材からの小説の形成方法と、作者秋里籬島における名所図会と読本との相互関係、手法的展開について、中間的な位置に考えられる作品の分析から明らかにした。

(4) 上方文学界の動態との相関関係の調査研究

近世後期の上方の読本作者の著述手法と、図会の制作の周辺にうかがえる文芸圏とその作品形成への影響について明らかにした。

4. 研究成果

(1) 図会もの読本・絵本読本の生成に関して

秋里籬島による「図会もの」の読本作品群について、『源平盛衰記図会』(寛政12年刊)、『保元平治闘図会』(享和元年刊)、『前太平記図会』(享和3年刊)とその周辺作と言える『絵本朝鮮軍記』(寛政12年刊)、『絵本年代記』(享和2年刊)の計5点を対象として、各々の実証的調査に基づいて総体的な解明を試み、主として、浮かび上がった原拠との相違、著作間の相関、文学活動との連動を中心に、特質の検討を行った。

その結果として捉えられたのは、図会もの読本で源家を描く主意、作中の人物描写には籬島の伝記・文学的嗜好からの影響が考えられること、漢籍の故事・章句を用いた表現方法が作者の俳諧活動の素養と発想に由来している実態である。また、秋里籬島が歴史を叙述することとそのときの態度は名所図会の執筆態度と通底しており、事実性に立脚しようとするものであることも捉えた。これは(4)とも関わる結果であるが、作者の文芸環境の周辺における、近世中後期の潮流としての歴史研究の志向と連鎖する可能性があるのではないかと考えられた。

以上の研究成果は、従来、創作性を評価する観点からその欠如を言われてきたこれらの作品群について、作者の歴史事項に対する態度による、創作とは一線を画する形成における意匠や方向性があることを捉えた点にインパクトがあると考えている。同時に、読本領域における同時代の文芸・学問の潮流との関係、制作の基盤となる知識体系の一端を見出した意義があると言える。

(2)様式の成り立ちと近世後期文学への影響に関して

名所図会の様式が、内容構成や造本に関して特徴的な定型を持つことについて、その定型の創出が既存の文芸の方法とどのような関わりをもってなされたのかを明らかにした。また、名所図会の影響下に様式が他ジャンルに応用されていく過程の様相について、定型の要素がどのように機能したのかということに着目し、実態と事情を捉えた。

その結果として捉えられたのは、様式の生成に関しては、本来的に名所記の系譜に位置し、客観性や情報提供といったその役割を果たしながら、同時に、文献摂取において柔軟性・包容性を重視することや実景描写を行うことにより旧来の紀行文学の動機である作者の素養の発揮や文学性の志向とも連繋し得ているという方法・形態の特性である。諸ジャンルでの図会の模倣・応用作品については、読本のほかに狂歌本と滑稽本のジャンルでの展開が顕著であった。これらのジャンル内では、様式の定型の要素を受容し、機能させることができる形態的な素地が独自に展開していたことが明らかになった。

以上の研究成果は、図会という中後期の上方から発した文学形態の意義・価値を捉えるなかで、その流行現象について、文芸様式の観点から伝播・浸透の実態と要因を実証的に示したものと見て意義があると考えている。

(3)読本形成の手法的試みに関して

作品生成の技法の点から、名所図会と図会もの読本の主要な作者である秋里籬島を取り上げ、領域としてその中間的な位置付けに捉えられる作品からの検討を行った。作品は、『虚空解紐』（天明7年刊）と『赤ぼしさうし』（文化7年刊）である。

『虚空解紐』は、名所図会の初期作等の諸ジャンルの書物制作の試みの後、図会を派生させ読本領域に乗り出していく前という重要な時期に著されていることから、この趣向と創作技法の傾向を明らかにし、作者の根底にある著述態度を追跡した。その結果として捉えられたのは、作中に選択・摂取する素材についての、時事や文芸の流行に着目した当代性の意識、世俗性と滑稽性の試み、自身の文化的基盤（教養）の影響、兵書・兵法への関心である。また、ストーリーの構想に関して、中国の史話をはじめとする歴史的事象・逸話から書き起こすことを定型とし、その原話の持つ主題や筋、枠組みを下敷きにして反復する手法を多用する傾向を捉えた。加えて、素材の内容自体に独自の特徴付けを施す創作よりも、素材に対する着想の在り方とこれらを取り混ぜて一話に仕立てていく技巧に重きを置いた姿勢が明らかになった。この成果からは、読本領域の図会について作者の著述態度（意図）の解明からも本質を捉える必要があることが見出されたと言える。

『赤ぼしさうし』は、奇談的内容の読本である。各話の成り立ちと素材源・趣向を検討し、その結果として捉えられたのは、著作間の連関、名所図会・「図会もの」読本・奇談集における素材（文化史・歴史・文芸）の描出技法の差異と選択、そして『虚空解紐』に多様な構想の小説の試みが混在することと似通う、語りの方、風俗の記録、小説的構成、批評等の趣向と筆致の種別であった。また、(4)と通ずる成果として、作者の知識体系や、俳諧を主とする自身の文芸傾向を投影した当代性の摂取も見出した。

(4)上方文学界の動態との相関に関して

近世中後期上方の作者の動態と、文芸圏に関する検討を行った。

まず、上方作者の動態の一端を明らかにすべく取り上げたのは、秋里籬島と同時期に京都で著述活動をし、文化年間初頭の読本界に事績のある盛田小塩である。盛田小塩の読本作品群制作の手法と傾向を明らかにした。その結果として捉えられたのは、読本の素材源の採り方における、素材とは別話を生成する着想・創意としての主意の反転、ストーリー単位ではなく鍵となる人物・事物の役割に特化した摂取、類話を暗示する形での取り込み、複数の素材の混交などである。加えて、同作者の著作間にある趣向の連繋を見出した。この成果は、従来検討の進んでいなかった、図会作品群刊行と同時期の上方作者の特質について、その活動を網羅的・俯瞰的に捉えて得られたものであり、読本の生成に用いられた技法を同時代的な枠組で把握する上で重要である。

文芸圏に関して、主として作品制作と文壇との関係の考証を試み、名所図会の派生作である『都林泉名勝図会』（秋里籬島著・西村中和等画、寛政11年刊）に関する事情を、とくに詩歌に焦点を当てて検証した。その結果として、次のことが捉えられた。まず、本作が図会の流行と作者の実績を制作の動機としながら、叙述対象の専門化する方向性から庭園史の領域に踏み込むものであることに関しては、庭園画かあるいは風俗画かという挿絵の種類と詩歌の書き入れの関係に差が見出され、さらに、その要因にも考えられることとして、既刊の名所図会との重複の回避も含めた、文芸性の添加を目的とする詩歌を介した趣向の工夫（解読を要する取り合わせ等）が明らかになった。これは(2)と(3)にも関わる成果である。そして、従来の名所図会でいった歌枕の古歌の収載に代わる、本作での当代文学者による詩歌の収載をめぐる事情が、近世中後期の上方文学界の動態との相関を捉える上でとくに重要な事象であった。本作に関しては寺院の後園で営まれた文化的交流とその場での文芸の生成の事例が指摘されており、また、本作で収載作品数が多い文学者には秋里籬島との接点が判明している文学者がいる。図会における詩歌の収載が、文壇との繋がりに基づく作者の素養と人脈を発揮する場であると同時に、林泉の持つ文芸的な営為の場としての機能を活用している実態が見出せる。また、画壇において指摘される、東

山における庭園画と文化人の交流の実態と似たような人的交流・文芸生成の状相が本作制作の周辺にあり得るのかという点が注視すべき事項として浮かび上がった。

本研究課題の成果を踏まえた今後の展望として、読本を中心とする戯作の制作と近世中期以降の学術的な志向の関係や上方作者の制作の基盤となった知識体系についての調査研究を深め、戯作の制作における作者たちの態度について、さらに解明していく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 -
2. 論文標題 『都林泉名勝図会』考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近世庭園の研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 21
2. 論文標題 盛田小塩作読本考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 清心語文	6. 最初と最後の頁 pp.16-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 68(10)
2. 論文標題 名所図会の生成と図会様式の踏襲	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 pp.23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 130
2. 論文標題 『赤ぼしさうし』考 奇談集の形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国文	6. 最初と最後の頁 pp.29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 109
2. 論文標題 秋里籬島作「図会もの」読本考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 pp.11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤川玲満	4. 巻 127
2. 論文標題 秋里籬島『虚空解紐』考 素材と構想	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国文	6. 最初と最後の頁 pp.14-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤川玲満
2. 発表標題 『都林泉名勝図会』の周辺
3. 学会等名 令和元年度庭園の歴史に関する研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤川玲満
2. 発表標題 秋里籬島による「図会もの」読本の形成とその周辺
3. 学会等名 日本近世文学学会平成30年度春季大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------